

※報告番号 応 甲 第 号  
不 乙

## 学位論文等審査結果報告書

応用言語学研究所

## 学位論文審査委員会

主査 大津 由紀雄 印 副査 嶋田 珠巳 印 副査 木山 三佳 印  
副査 瀧田 健介 印 副査 クリストファー・タンクレディ 印

学 籍 番 号	86150001	氏 名	テーボルト ジョセフ ロバート
---------	----------	-----	--------------------

学位論文題目	Possibilities in discourse: The pragmatic presuppositions of epistemic <i>may/might</i> and <i>must</i>		
--------	---	--	--

学位論文審査結果	⊕ . 否	最終試験結果	⊕ . 否
----------	-------	--------	-------

## 学位論文審査及び最終試験結果の要旨（1,500字程度）

本論文は認知的可能性を表す *may/might* の談話における意味の分析をとおして、談話における意味決定の一般理論の構築に向け、確実な貢献をすることを目指したものである。認知的可能性を表す命題の真理条件は、「埋め込まれた文(プリジェーセント)が話し手の知識と矛盾しなければ真である」とされている。しかし、その方法ではモーダル命題に対する話し手や聞き手の真偽判断が説明できない場合がある。テーボルト君は認知的可能性の言明の CG (Common Ground) に対する貢献を特定することによって、Kratzer (1981,1991,2012) の人的可能性の真理条件を変えずにこの2点が解決できると提案した。

CG (Stalnaker,1973,1978,1996,2002) は談話の参加者の共通ビリーフで構成されており、言明は言明された命題を CG に加えることによって CG を更新させるための行為であるとされている。これは Grice (1989) の量の格率の作用だと考えられる。話し手が認知的可能性を言明するということは、自分が認知的可能性の言明を適切に行えると判断したということである。テーボルト君は、言明という行為は CG を更新させるものであることを考慮すると、この事実は話し手が自分の知識が CG を更新するのに十分であると考えていることを表すと指摘した。さらに、人的可能性には、話し手の知識が CG を更新できる状態とできない状態を区分けする性質が含まれていると論じた。聞き手は話し手が量の格率を守っていると信じているため、更新できない状態ではないことがわかる。そこで、更新できる状態では、語用論的前提の形で「プリジェーセントの肯定的証拠がある」というビリーフが CG に加えられると提案した。

テーボルト君は、認知的可能性の言明は CG を更新する時にしかなされないと考えると、話し手が「p の可能性があるかどうかかわからない」場合は、CG の更新ができる知識状態での認知的可能性の命題真理値を知らないという解釈も成立し得ると論じた。話し手がプリジェーセントの証拠を持っていない場合も、CG の肯定的な証拠がすでに CG に含まれている場合もこれに該当する。また、認知的可能性を言明してからプリジェーセントと矛盾する知識を得る場合に撤回するのは、言明した命題そのものではなく、「プリジェーセントの肯定的な証拠がある」という語用論的前提であると提案した。最後に、認知的モダリティーに関わらず、モダリティー一般の理論に対する真偽判断が何を示唆しているのかを考える時に、想定している CG の状態を明示的に示す必要があると提唱した。

冒頭に述べたように、本論文は英語における認知的可能性を表す *may/might* の談話における意味の分析をとおして、談話における意味決定の一般理論の構築に向け、確実な貢献をすることを目指すものであるが、その目標は十分に達成された。

以上に鑑み、学位論文審査委員会はテーボルト君が提出した論文が学位論文に値する学術的価値を持つものと考え、学位論文審査に合格であると判断する。

テーボルト君は応用言語学、ことに、その基礎言語学的基盤について幅広く、かつ、深い知識を有し、研究倫理についても明確な認識を得ている。よって、ディプロマ・ポリシーに定める「高い倫理性と強い責任感を持って研究を遂行する能力を身につけていること」を満たすと認められ、学位論文審査委員会はテーボルト君が最終試験に合格であると判断する。

以上の結果、テーボルト ジョセフ ロバートは博士（応用言語学）の学位を得る資格があると認める。